

水の哲学

ベーコン

「折をみて良草に水をやり、 雑草を除かねばならない」

フランシス・ベーコン（1561-1626）はイギリスの名家に生まれ、ケンブリッジ大学などで法律を学んだあと国会議員や司法長官を務めた。1618年には大法官へと登りつめたものの、収賄の容疑で有罪判決を受け失脚。晩年は著作や実験に明け暮れる隠遁生活を送った。

1605年の『学問の進歩』の発刊を契機にベーコンは学問の「大革新」を唱え、いわゆるイギリス経験論の創始者として科学的思考への道筋を切り拓いた。世界的に知られている「知は力なり」という格言は随想録に収められている。

彼は劇作家シェークスピアの同時代人でもあり、シェークスピアとの同一人物説が流布されたこともある。

帰納法による科学的探究

ベーコンの最大の学問的業績は科学的方法論の礎となった帰納法を緻密に体系化したことだろう。それは「我思う、ゆえに我あり」（『方法叙説』）という言葉で有名なフランスの近代合理主義哲学者デカルトによる演繹的思考方法への批判も意味していた。

簡単にいうと演繹法は疑う余地のない普遍的な原理・法則・命題から論理的な推論によって個々

の事柄を規定する。大前提→小前提→結論という三段論法がその典型だ。

帰納法はその逆に個々の事柄の観察や実験を通じて普遍的な原理・法則・命題を導き出す。いわば頭のなかの思考実験を科学的な実証実験に置き換えたわけだ。

17世紀を代表する科学者で気体の体積と圧力に関するボイルの法則で有名なロバート・ボイルはベーコンの提唱した帰納法を科学的探究の基礎に据えた。それでベーコンは「近代科学の父」と呼ばれたりしている。

ベーコンが考えたように演繹法と帰納法は一見するとまったく相反する学問的アプローチと思わ



れる。しかし実際は数学などで演繹的な思考方法が欠かせないように両者は相互補完的な関係性にあるとっていいだろう。

たとえば実験によって実証しようとする仮説を立てる際に論理的な推論が介在することは避けられない。仮説による実験そしてまた実験による仮説という一連の反復のプロセスは帰納と演繹の一連の反復のプロセスと見做すこともできる。

払拭すべき4つのイドラ

表題の言葉は随想録の一節で正確にいうと「人の天性は良草を生ずるか、雑草を生ずるか、そのいずれかである。だから折をみて良草に水をやり、雑草を除かねばならない」となる。ベーコンは似たような言葉として「もって生まれた能力というのは植物と似たようなものだ。研鑽によって余計なものを刈り取らなければならない」とも述べている。

この場合の「良草」とは科学的な知識・思考・認識、「雑草」とはそれを妨げる偏見・憶測・先入観などと解釈することができる。ベーコンは後者の「雑草」をイドラ＝幻像、幻影、偶像と呼び、きびしく批判した。

ベーコンは自然哲学の先駆者アリストテレスの『オルガノン』を超えようとした大著『ノヴム・オルガヌム』でイドラの種類を種族のイドラ、洞窟のイドラ、市場のイドラ、劇場のイドラの4つに区分している。種族のイドラは人間という種族



に共通のイドラ、洞窟のイドラは各個人に特有のイドラ、市場のイドラは噂や風聞によるイドラ、劇場のイドラは権威に屈従することによるイドラとなる。

さまざまなイドラによる偏見・憶測・先入観はものごとの本質を不可避的に見誤らせる。帰納法というリアルな認識論を唱えたベーコンにとって人々のイドラを払拭することは至上の哲学的課題だったにちがいない。

実験途上の最後

汚職事件で有罪判決を受けたベーコンは短期間ながらロンドン塔に幽閉されたという。刑罰は免れたものの王室の派閥争いに巻き込まれたという説もある。

公職から退いたあとベーコンは生涯最後の数年間を著作や実験に専念した。かつて随想録で語った「読書は充実した人間をつくり、会話は機転の利く人間をつくり、執筆は緻密な人間をつくる」という言葉をみずから実践したことになる。

1626年春の寒い日、彼は戸外で鶏の腹部に雪を詰め込んでいた。いわゆる冷凍技術の実験をするためだ。そのとき引いた風邪が原因で亡くなったと伝えられている。

近代科学の精神を体現し、観察や実験や経験を通じて事物の本質に迫ろうとした孤独な思想家にふさわしい最後だった。（高倉）